

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-26

横田は出されていたお茶を一口すすってから、真紀に微笑み返すと頷いて見せた。

「絹本にするか紙本にするか、正直言って迷ったんですが、紙にして正解でした。胡粉の塗り具合からして、最高の紙を漉いてくれました」と横田は五代目に頭を下げた。

「注文を受けた時は、変則サイズだなと思いましたが、先生には時折、驚かされます」とI氏は親しみを込めて言った。

「実を言うと、怖くて、オリジナルは持って来られませんでした」と横田はよほど嬉しかったのか、そう言って本音を漏らした。

提携関係にある画商の朝倉の所感も聞いてみたかったのだが、彼の美術上の戦略から推して、いち早く東京画壇の間に流布されるのも面倒だったので、日本画に一家言を持っている越前のI氏を、信頼できる無色の立場の目利きとして、最初に選んだ。

「新境地を開きましたね、先生。私は水墨画のほうが好きです。着衣の下から匂い立ってくる独特のエロティシズムが新鮮だし、なんと言っても、聖なる光を纏っているのがすごい！」と五代目は褒め言葉を重ねながら、裸婦像のモデルは紛れもなく目の前にいるチャーミングな女だと、いち早く見抜いていたが、そんな素振りも見せずに、「大事なことを忘れていました。『こぼせ』の予約を入れておきました」と話題を変えた。

「ありがとうございます。Iさんが頼んでくれると、何かと助かるんです」と横田は礼を言った。

I製紙所を辞すると、三十分余りかけて越前町梅浦。若狭湾の波打ち際にある宿『こぼせ』に到着した。波打ち際と言っても、コンクリート護岸になっている。

四階建て十四部屋のこじんまりした『こぼせ』は、「創業明治三年、ステキな夕日に出会える海辺の宿」を宣伝文にしているが、やはり十一月に解禁となる越前ガニが売りだ。

作家の開高健が晩年まで越前ガニを食しに定宿として利用したことでも知られている。若狭湾を一望できる三階の角部屋に通された横田は、「この部屋、この部屋。繁忙期に二人だけで泊る贅沢ができるのは、なんとってI氏のお陰だ」と満面に笑みを浮かべて真紀に自慢する。

十一月十八日土曜日午後四時過ぎの若狭湾は、曇り空の下に鉛色の穏やかな海が広がっていた。

裸婦像が高い評価を得たこともあって、上機嫌な横田はチェックインも早々に、「貴女もひとつ風呂あびるといいよ」と言い残し、四階にある男性大浴場に行った。